續增翰道新語 一ト

ロ 9
4436

D9
4436

京都帝国大学図書

續鳩翁道話巻之下

男　武修聞書

山川の末々なれども、いちづらもとをたくさんそうむ淵をつくり。山家をそへ。茅葺屋敷しく。あるものを合せる中ふ。杉の実紙俵囲みゝ。合せる和多。その製法い。杉の殻をとりて。実だけ殻よりまく。谷川をあるく。若くとりて。俵囲みまる なり。今年のうちの実。谷川ふ杉

91-1415

きべ赤がり。実とりて。敷ぐうすまきべ。浮んで
流きまと。人もあまぐとり分裏頁死捨をを
拾ぎ。うみ。ひがるといふ。ようみてよみ〳〵うこと
きちえまする。面白いるどやこまふ。はつく
庫ふ。拔寄ゆまする。まめる天保癸巳の年
茶敷のうひ。きく。毒ものう。飢渇よおよぶ人も。
多くあること。実〳〵ふ。〳〵さる。御麁〳〵揉。ふ便
のるふ〳〵めこと。拔荒一助と郡〳〵。松の皮茶。
ちと食すの法と。ふ〳〵あそびさ。拔り

あり〳〵。ひろく。満人ふかどこさせ。ようふれ仁
恵のありがたさる。中ふあるあり。ふれどと。
百年のち。もれ。その製法と。〳〵ひます
ることも。ひろれとぞん〳〵まく。名まとと
ひへこそぞ。今その一法と。涉拔寄ゆまする。
雲の皮。茶なども。ふるる地もこぐうませ
う。ちと食するの。いうる飢饉ること。ふれ
ぐう。実ふ未曾ることの記法で。ぐりまと。
どうこともョウおいえうこしませ。拔荒一助の

文ふ

土鄰之散法　武安医の家法

一　ふいいづるこの方をもて水にてのけるべし。ためらさと搾び。方寸ほどの筆にて水筆にて。摘の中ゝゝゝゝかさまぜ。上水をとる筆数へ人。まゝ水筆にて。ゝゝゝかきまぜ。別の摘ふにて。唐よのるる水にとる。又水筆にて。おのゝゝゝたまぜ。水よりゝゝおく筆。二日のあひだ。一日ふこゞんづうさまぜ。すまし。上

水とかつるなり。葛の粉ゝゝびの粉を。水に充すり法のごゝ。方のごゝ散法せ。ちへ。水動筆にて。者ゝゝゝゝさ鄰のごゝゝゝ合へ。そのゝゝゝへ。菓大根など切こみ。もみゞゝく者ゝ合ゝとゝ。一日二合ゝゝ合まぜくゝゝ。諸ふけはゝゝひび。方数を合せゞゝゝ例ど。弟体はゝゝ。まゝやゝゝゝぞ

右の通。散法の仕やゝと。ゝゝゝゝ。あそばゝまま

しさ。けうぐこい思ひ石ゆえ。お名沢といふ。ます。
ちゝ見ゞ。滅多ふ。ろく合つそいきゝ林どと。
耕や後その中よりあるとゆせべ。ゆどんがうゝ
め。ちゝ家とせんぐ。仇僅とゆきうより。
人の名を初めく。仇僅とまめうゝが。形要
ぐござりませう。年竟業糧業恙ごあま
つく。天地根略のお。おくしこと。多るより。風彩
もちらへまきまをぐ。とうく分島負分ろう
をすく。お業大切ふ初まきりと。いぢと

分限おゑのさうえけうぬと。いつもへござ
ちませ。たとへ。竹木の花さ花多ぬ人の
業とはじ半じや。はじやうふ。むさきこのる
竹木ぬと。大小のござりまきるん。人よ貧多彩
遠のちちうゆうと。はじ半でござりまきす。さり
みうゝ。名よ。ちるふ業まぬと。花のさうぬと
いつ半へござりませ。花のさうぬい。竹分の分
島負分格ぬう。やまぬのじや。分とをそこと
うむせとあまとよ。んぐ欲い。面白い半でい

ごぶり伊世の新。ふ法ふ法ふ法

ゆきさんぐらなりの母さ。村うへも中に狭うなる
農母も。はあふ他へかげとうまーさ。孫り
しそのふ。乳母と機糸とぐりでおぐりまと。
叶乳母名をおとせとてんぐのうひぐしへ
人ぐござりゆーぶ。叶江戸屋へまえふ出ま
く。こ年どりの。結今を貴まーまど。その
乃ちの不ぬをまうさ。結今も出ませど。乳母の
親ぐとうの。いとをとり仕をと。やまままど。
さーふ仕ーど。その加ち。叶家江戸屋へ関係と

ぬう。ちふ。まーいひ。農母とひ。仏得ーも宜ー
ーー行ぐ。いづを幸ーーー。家名引絞とん極
仕ーさ田忠。一ーは機糸と。ふ煙ーぞんぐ
まーく。親里へ仕りぐーー。つまーり分の衣まと。
とぐーーー貴ーーひ。今ーーーー。おや里へ生
ーー。自分の生涯分とーあ。中ーひーとり
ーー。江戸屋の郡と。ふーーひ引紀さんとの志と
ーーー。親里ーりーーー一れとりーひ。則ーーー
川ーー村の。人別へまーー。かぐーりの大新

なれば。所詮人のらうにのがれがたき折
こそ。神なりけのかをかんとうみ山うけく。百
里の路をたづきも人。遥かに多武山。今ひく大
和路へ。たづねまゐらんと。こゝろしまこと。さて
神おもく。主の家ととりあそぶこゝろづし
とはげ。こゝの紀ぐそといふこゝしまこと。その
わけは。在中ゝ者い女のひとり住居と
をゝるなるべん。ゝよりてなるべし。又人り
こゝがゝまゝ。先一ゝ鉄ゝをふまず。

片こゝは壁ゝ地をつゝるど。片三ゝ元結天去こゝく
壁をゝるゝ行ゝゝをせまゝ。かゝくんゝ拾ひて。
はゝの小国先へゝ年ゝ行ゝゝまゝこ。ナントあゝ紀い
太義ゝこゝりませぬ紀。け人出生ゝ。門国書名
紀貴弁紀。又及国村の百姓。去七とゝ人の娘
じゝ。年ゝ三十。こゝゝゝゝもゝんゝゝかゝど。又
ゝゝゝて年ゝでもなゝ。忠義の為ゝ分をう
まゝず。主乃家を引紀こゝとの志ゝ。考へてから
こゝ出世。まゝのこゝこゝ幸ゝこゝゝ。古人の

孝ふ。志ある者いかゝとて。いろ〳〵の方法でも。志さへ立
まする。成就せぬことはなし。ある川の
中をつら〳〵ながめて。雁がきたるのかゝるを魚と
知てゐる人がある。これが中〳〵命や釈のいひ分で
出来ざるものとぞ。この。孝の。なるべきもの。飛も雑をわけ果て
ども。孝の。なるべきもの。飛も雑をわけ果て
日がの一日年とおもて。高過しふうら。行程魚の多
き紙と思へば。一疋すの雑魚十づゝ。ゐまが。後人
や名ぞ〳〵出来るものでいなへ。ゐ魚を釣さ

いとゝ志だろうぞ。けれども出来ぬものゝ。先ゞ
此日。俄に出ひたゝと志でいなへ。平生去ごと
するゝと。者ひするゝと。たゞ魚つる事べうり
ありとてある。此孝をもてとめてを高へのゝ。志
じや。古人も。ゐまゝ。ゐまゝふ事。ゐまざるを
志とゝいへと。おもせらまと。いづまとゝ。
ばけゝ。人い志の紀事べうり事いなへ。
時じ志を記すゝ。ゐまゝ。去のお乳母どのく
ゐまふ。孝ゝ志を。ゐまゝと。わづ仏さ

ちづくい事いなかい。年老あまい出来ぬ。ぐまい出来ぬとゝつか。志がとゝのはぬのじや。盃よのいゝく。志い気の帥なゝと。ゝゝいゝものじや。ゝゝゝゝぐゝが碎くゝと。事いつまゝゝゝゝ川て志ます。人い気ふよゝゝ知ゝ。その気がゝゝゝと。番一事持とゝのゝゝ。返事ものゝとゝやふなり。うゝゝも類ふゝゝ。ゝゝゝ遣ゝゝ。居腰ゝゝゝゝ振ゝ。こゝ振ゝなゝのゝ。ゝゝ志ゝゝぐけゝものじや。出来

んなゝりませ。志がゝそべ。気い引ゝゝ。女の分でと。百里のゝゝと。疏まゝりが出来ぬゝる。まゝていんや。ものゝゝく。釈迦ゝ事人。白人をゝ教業出精が。出来ぬゝいゝ。六尺の横鼻輝のゝまゝを。面目ゝ。志ゝゝゝ男のゝゝだゝゝじやござりませぬ。夫ゝ法人。姑ゝ法人。家内のとり志まりの出来ぬ女中い。続ゝ教いあゝさまぬ名しやチトお考ゝゝゝれませ。ゝまゝほいゝおゝゝい俗がゝる。むゝ続ゝ志ゝゝ国の人。

へより。フト袋屋の又兵衛さんとこんまで。なかなか
ひるねがある。うぎさうふ若のぞいて。紙さ
あがりとあげ。ヤレ親父さぬ。おかつうんと。かの
袋をとらうとする。真っきもと洗し。ちまた
どうふうしやうのじや。イヤどうも ちませぬ。見へ
ぬ分の親父さぬじや。めつさうみ。そまたこちの
ううものじや。十二ううものれ。貴和ちうば買ませ
うと。代物ととひ。かの袋と。家屋へ持うう。
さそ物いうくうんを。返事日ぬ。うれい 姿

姿と冥途の宿があまたべ。おあうがうさうえぬさう
お。行うをせよ。死つまさ。三年目三四月うり
かるうとうへか。ちうどいうすじやと。わが親とを
ちうを抜んぐ。ふうり。ひをうり持へ。ひをうり
二階の出持へかうて。出をいうて二階へ
あうう。なるうさ女房が。月半あうく。二階の
出持のうを。ぬうくうんまべ。ひうものがある。
うり出して又んをべ。出又出女がある。見も
又びううう。二階うう。死んぐうり。亭主の

物ぐるとつまんと。さくゆうとあくゆう。悟氣喧
嘩がとび出つと。コデ喧嘩の妙琳が突法けく。あい
ろはさると。いよ〳〵えんろうよ花が咲く。妙琳も
涙〳〵さく。ソンナラもうぐ二階へ住く。男衆女
うつえ〳〵きまもうと。二階へまけとく。殘
と一月元。こうも又びつくりして。こうい〳〵
大ちとあげく。あまりかまへごう。悟氣喧
嘩をこうしやくふ。紙〳〵。氣毒や。こういの
女中がたよめ〳〵きまもとこえ〳〵。ちの

活の相そうとしてみる。十二ト面白い話句じや
ないか。トツクリとかしちあ〳〵いらつしませ。妙姑
の角づさあひ。親類の中角びい元角いさ
うひ。女丈げんえ。村と所用のふ付合釈子
を足のいひごもうろうえ。けとうの仲間
うちが多い。うえ人のえ釈ふ　ようのうる
かぐみの新住仲ようく元まとが我すぐうう
ゆ〳〵わづ多とかつうとうう。学問の行脚で
ござうます。角ふ立うつえとまべ。忠孝と

はとめいふ。そのの乳母いと年ふ村とへう
つる。ものゝ日日をくらまさるら果て
乳母が推量のごとくうも老母もちりぐ
まゝゝまべ。いろゝ志立まゝゝ。揚ふとる
そぶてまさる。む村ゝ。左衛とうけ乳まゝ
ゝう。江戸屋の年ちまでだ。その家名を紀を
ゝい。一色ゝゝ。村方へ射。出羽半ぐ
ごぐうまさまべ。か行て村方の乳母へうけ
ちこ色まゝゝう組ふ。幸ふぐふ行うまゝ

多ち屋。利金ふ西と組拾月。冥かのゝあ。村方、
治代ゝゝゝさゝし。家名お續の義と乳
母ゝ。村役人中と始。その志とよろちび。とと
どもふ西結とゝゝ法ゝゝまゝ。如倫ち屋
数いうゝ扨まゝゝまべ。分とかく不ちごさり
ませもども。ち人へいまゝ。他ふへかけとかゝあ
つあ。屋数の渇ふ。扨だゝうの小屋とうゝ
かさまゝゝんで。こまふ引ゝう。人の田代屋
と。けづゝう伸ゝ。ぬんと濁ふゝ。田とさゝ竹

とうろうを荷ひ出とゝひ。人のあとをかゝゞ
しその。銀兵衛幸吉。つゝ拍もごろうませの。夜い
夜うべゝ時のうるのもゝ。ゝ。ゝ。

言くゆすりと。おのづゝ生れると。疎四郎とゝ
んがおとゝ。百姓の子へ。うみのこと
ゆり。ふと。あと言ます。あうゝ。悪ふ
よいを年ぐごゝうまする。十八年のひぐ。紅
梅の合わも。わゝ兎い乗釋のゆふことゝり。
稼をゆぜくゝべ。揚屋へ。常俗の金とゝべ
させ。四ゝ母とゝどゝと。わゝ分かゝ尾のん
わと。先ひまもめか。丈も及ゝ。悪ゝごゝう
ます。ひ孫がゝぐきまして。揚屋十八年のとゝ。

元の屋敷地を買ゝ。ゝ七百乃
家を。ゝふ建。ゝ。揚小若きへ
とめゝつひ。田地を所に及ゝ。丈のゝみ
らど。ゝきふ家出ゝ。ひゝまゝ。光母も老へ
揚ゝめゝ。ひゝゝと丁稚扇も。子代扇と。
女子扇も。石稼ゝずとヨウ生てゝまゝ。
むゝ。本苟屋ゝへ大坂がゝ。小ゝ旅
ゝ。平家と戦ゝゝと。味分の長へ中
什ゝ。茶故ゝ。荷元別番実豊と。名祭

ものがたり。かうとどうとひくるま。家と入して
坂口と申わめき。指図せしまて。うまい義仲。
いはゞ猿猴のうらふ。わかい。あわつく実盛
ゝ七ケ日申ゝうまきまゝ。ゆう。ごさります。
此あんと。おつしつて。猪かうつと家と入ゝく。
うまうとうへ。敵射ち。志。ナント。おもしろ思ふ
いつのでハどうませぬう。七ケ月へさてかさ。三日
くうぜゝ。おそも。帝ゞうい。まゝや。又年十年。
なるひい半。一年。主人の書とうけく。その

悪とおうど。うゝとと。自猪とうとくい。勿
論なへうしやごさりはせぬ。在所よりと時の
半とヨウゞひ。ゝうこんこがよい。義和い悪
りめんの紋付。袴ふ。雲ふ猪のりかう。神ん
ごうよ。新色ゝのと。けともうい。嗅ゝ。ゞやし
ゞひ。指の中ゝ。鼻汁ゝまて。ゆりご。雑炊ゝ。猿
とうゝゝ。うゝ。ゝ。ゝ。

あへのと。ヨウはがたもあるるのじや。こまるあまごくの
妄念のかくまうじや。ソコテさつぱり白人の恋をもまと
果く。ちくこのものじや。ちまきがけ家よわ〳〵ゆ〳〵ばど。
是のすりこ木〻なる程。失ひたるさしてゆうものへ
うまい。おとうあとしゆ〳〵ゆ〳〵ばど。是があの楽
い出来いせまい。わしがおやゆ〳〵ゆ〳〵ばい。家
内中が。みるひぐる後うく。かつへおうであうう
と。我もくと。鼻とのだして。家内中が。おれが
の舎じや。こまくこひ出さうがある。さう赤の

手代どの。書ふ四くしていく。是ゆくそつさ。彼
ちうらう鬢と太郎はまて。東山へ花見へ出で
かけと。ちくうらの屋敷よ。おりひげけう
出あひまし。ソコデかの手代どのがじつうし。
挨拶どまうと。そこへおくうか見ようまま
ゆとそひ拶く。おとちうとうと無つて。屋
敷と。ゆまりのものふ無ちゆ。ゆそもせど。おうり
うくうらへゆくまて。相談よ入く。かの手代
と呼はけ。そう方へくへ。書ふ性と実さう。

ゑおのゞゐを行じや。そもそどこの國ぞ。三百六十日
桑つゝ合してゐるあまつぶ。久〳〵うお月ふかゝる
ませぬとゝ。うんとゝ撰拔じやと。ゝゐ行ゝを
ゝ。お代どのゞ。バイあのゆゝふとゝろぐ。ゆゝよ
かゝう伸ゝゝ。まゝ。私ゞゝゝ。百年月でゞゞ
ゝまゝとゝゝゝゝ。うゝゝゝゝゝゝ。この百年月ゞ。
一年のうゝふ。ゝこゞゞ。ゝゝゝゝゝゝゝ。ゆゝ
なゝしませ。かのおうじどのゝゆゝふゝ人のゝゝ
ゝゝそゞゝ。おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ十

年の年季とはゞがうゝつゝゝ。紀伊人をひゝゝ
出ゝぬゆうゝ。勅ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。或
人の主殿寮「人のゝをまうべゝゝゝ
雀ゝのゝゝとゆゝふ嵐ゝゝゝ。忠孝い
天下の大事。ドフゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝとゝゝ。ゝゝゝとまりゝ。ゝゝ狀ゝゝゝ。
ゝゝふ。御行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝ。御茶ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

なりしが。扨ふ姿をくし。涉獵の餘習ひ。
ゆゑりまする。かの男と共にそこを深む淵もあれと
つよ。強のこころを。今こそ合ふれと。さぐこい
るべへござりませあれ。扨ゆく川崎村の人家の
ようふ。扨ふ近ずろ馬とのあく。はひこころ
こまをふ。ふよるるとず。さてい扨ふとの。
よい馬と出給しまこ。れとやさずべゆまい
と。張弘扨ふのうへ扨ふ。屋く扨といい
ふまゆく。扨ふもあこふ。ふ世るの

人い。よい馬と。出給ふ賣とふ賣濃とん
扨。まこ馬らひと。張ひて。ゆふ賣とおず
新こ。ひそふ徒弟ふとんとん扨。ぐくるの賣
ひの弟こ。うこより徒こる人いない。數十年
扨ふと濃ふ。かこ年い扨ふしいす
じやと。人へこうこ中さしまこ。又扨ふ
弟作の陸ふ。ふとひこ玄浦とふて。
二里ばりの和へ茶を作けて毎ひまする年が
いる。必その日いるのうつど。一日ふとりこせまして

稱その條。あさなるあさなる勤と。こゝろ〳〵。
こゝを揚げるのこゝをこゝてこゝを。弓のこゝを こゝ
ゝ。かゝる。かゝるこゝ。一つこゝ。一つこゝ。
こゝて。こゝる一つを弱こゝをこゝ。こゝのこゝかこゝず。
こゝこゝ小屋住居の雑織の こゝと。なれ物と
あこゝも。こゝがあこゝ。かこゝるこゝこゝれば。こゝり
こゝのと 弱千年いこゝず。どあこゝこゝの 志こゝと
こゝ食料の桑糧と。毎朝こゝこゝで。小こゝこ

絶こゝとやこゝすこゝや。こゝ絶こ

「山寺のあこゝこゝこゝ。こゝきけば父こゝこゝ。こゝ
母こゝこゝ。こゝこゝ。こゝこゝ。こゝこゝ。こゝこゝ
こゝこゝこゝこゝ。いこゝこゝ一こゝこゝ。こゝ
こゝ。大意悲心こゝ。こゝこゝこゝこゝ。こゝこゝ
ゆこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ。中
こゝこゝ。父こゝこゝこゝこゝ。母こゝこゝこゝ。指別こ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ。今出のお
乳母こゝこゝ。意出心。命殿こゝ。こゝこゝこゝ年

主宰味もぞんじまゐらせ候ども。みうらふとりうくゝ主人の家と聞かうくゝ。主父母と敬ず。忠孝の志乃ありがたく。幼墓堂蓋のむうくゝと。うつくしふとづうくゝいるすかいろまへとぞんじまゐと。春經うくと。分とくゝて。道と幼い。名を後世に揚るとと。いまこそ。おふけか乳母どものと。ふんおろひふいものでござりまゐと。扱主子文ゐ。こうまと又ちくゝ。なるいくゝ。主年江戸表より。初望とくゝ。侍宮はゐゐくゝ。松坂へ行ら付

ゆくゝ。夫より母をとづくゝ。川ゝを村へ入ゐまゐまくゝと。猶く遅留くゝて。又松坂へ帰ゐ。ゐ文へ入ゐと。ゐ年なまび。揚屋とも世ふ弾絃ゐゐと。主男をして。かづのゆまゐ文。文の命ハ。四主人とゐのんぐ。まゐゐ出くゝとゐ。よゐ法ゐけ。わるゐ付け。わゐがあぢゐゐ年じゃゐゐくゝ。ゐて及ぶあ。ゐゐゐ拒別大切の分なまび。乃年ぐかりゐあゐくゝせど。彼りゐ女なゐゐ。かゐゐどゐゐそゐ

なる事い。うりまはぬぞ。りや。病ひだるうけ。分ふ
厩の法く事がうてく。爺四の家をはぐりや
うと。私と言ぐくてくものでいうへ。返すぐも。
分と清浄うて。弟海をうつやまこの乳母い。
はくへ四うぬ年ど。こうこうぐ分拍のわうへと
と。乃年くうつ母と。わうい内ぐ雪よ知ま千う
ぞ。ゆうく与まで。はくしんぐ弟夫とうつやま
と。結ふ。弟うんと考うまと。中年を。拍拓西の
活ぐどうまする。古分よ

「ゆうう拓の親乃はのうとうひをる。んぐう
うを出ぐみとぐめそ　はく秋のこうふ毎ひく。一
しかありぐふ宮くまする。はこうこそ拍拓を
そぐそく事なまぐ。その人が。れうく。柔
和うく。紅をかく。左年の解うまぐ。ううく
人が男も女を。親をふぐ。こうぐまんまど。
拍拓をうぐう。一夜ふる。絵へうぐぐ出ど。こま
全く。乳母のうぐぐ義へ育はうを出る。全る
美をおひうまま。さまどる。乳母の叢粛

なるほどいまこそ。おもふ。織る人も。関あるよう。
学ばまほしき。おもふ。こゝに全く。孫のうたとおもふ
四ゑじや。すぐれ一条かも。しの事ども。又
唐土天竺の事でとき。現在ぐ今の事
で。おもふと私が。おもふ。人物孫ども。又
その小さいの人とも。けまつり申さるべや。
こゝとおもふ。ヤスラヘ。どうぞ。ひとり。
この志と本事。かく。孫の中と者。私
うなる拾ず。かんとみぐさこのぐどう

まず。歩人の歌より
「この人のりの心いまず。みぐいなどう
くりとうぐさ。拾ぐんかくうヤせう
ト社

柏木氏